高校生のためのライティング講座の実践

竹内　元[i]・深見奨平[ii]・湯田拓史[iii]

要旨

本報告は、宮崎県立宮崎南高等学校と宮崎県立高鍋高等学校と協働して実施した高校生のためのライティング講座の実践を対象にしたものである。高校生から提出された課題作文に対する全体講評の内容を整理し、高校教員を含めたふりかえりの時間を設定し、課題を共有するとともに今後の展望を検討したものである。

１．プロジェクトの概要

本実践は、PISA 型読解力を経て大学入試等でも問われるようになった「論証」を視点に、高校生を対象に、複数の大学教員による課題作文に対する指導助言を行ったものである。大学教員によるコンサルティング機能を視点とした高大連携の地域貢献事業である。本年度は、宮崎県立宮崎南高等学校と宮崎県立高鍋高等学校と協働した。

実施日程等は、以下の通りである。（表１参照）指導助言は、竹内元、深見奨平、湯田拓史の３名で行った。宮崎県立高鍋高等学校とは、Zoom による遠隔リアルタイム方式で行った。

日時	学校	テーマ
10 月 5 日（木） 13：30－15：00	宮崎県立宮崎南高等学校	読書活動の推進について、あなたが考えるところを述べなさい。
11 月 8 日（水） 14：00－14：50	宮崎県立高鍋高等学校	これからの社会が求められる主体的な学びのあり方について
11 月 29 日（木） 14：35－15：25	宮崎県立高鍋高等学校	部活動外部委託の功罪について、あなたが考えるところを述べなさい。

表１：実践の日時とテーマ等

なお、実践のふりかえりを、1 月 9 日に、両校の高校教員を含めて行った。

２．指導助言の内容

高校生から提出された課題作文を指導助言者が読み、全体講評として指導助言を行い、その質疑応答を行った。指導助言の内容は、以下のとおりである。

（１）段落のない文章があった。形式段落を分けていないのである。序論・本論・結論に分けた上で、本論にも段落分けが必要である。とくに段落分けは、単なる読みやすさのために文章

[i] 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター
[ii] 宮崎大学教育学部
[iii] 宮崎大学大学院教育学研究科

を区切るのではなく、論文構成上の構成単位である「パラグラフ」の理解につながることを理解させる必要がある。

（２）適切な日本語表現ではない文があった。書き手から読み手へと視点を変えて、自ら書いた文章を読み直していないことが伝わってくる。主語と述語が対応していなかったり、「だ・である」調と「です・ます」調が混同していたり、一文が長すぎたり、誤字・脱字等が見られたりしたのである。相手に誤解の余地を残さないようにするとともに、無駄な文字数を割いていないかを検討し、内容を読んでもらうための推敲が足りないのである。

（３）序論で解題がなされていない。「これからの社会で求められる主体的な学びのあり方について」何を、どのように述べるのかが書かれていないのである。たとえば、これからの社会で求められる主体的な学びのあり方について、「あなたはこれから大学でどのように学ぶのかを述べなさい」なのか、「どのような方法が求められるのか、教職を目指すあなたが考えたところを述べなさい」なのかなど、テーマをどのように理解したのかが示されていないのである。「これからの社会で求められる」とあることから、未来予想が入る点をふまえたり、「主体的な学び」というキーワードをどう理解したかを示したりする必要がある。キーワードの内容、視点、適用される範囲などを５W１H で焦点化する作業が欠けているのである。その上で、是非なのか、方法なのか、必要性なのか、何を考えたのかを自覚することが求められる。

（４）本論では、根拠と事例がある意見が書かれていない文章があった。意見そのものより、根拠と事例と意見のつながりが重要である。そのさい、意見－根拠－事例という枠組みというより、主張－根拠－事例のつながりが意見であり、「自分はこう思う」という主張に、「たとえば」と事例を示し、「というのも」となぜ事例と主張がつながると考えるのかという根拠を述べるのである。論証とは、「〈前提〉ならば〈結論〉」と二つの文がつながっていることであり、前提つまり根拠のない結論つまり主張はありえなく、前提＝根拠が重要なのである。結論＝主張に斬新さは求めておらず、結論にどのような筋道で説明しているかを読み手は読んでいるのである。求めているのは、感想や自己 PR ではない。何を思いついたかではなく、どこからどのように考えたのかという論拠を示す必要がある。

３．実践のふりかえりと今後の展望

高校生と一緒に本プロジェクトに参加していた高校教員は、自らの小論文指導そのものを問い直す契機となったが、日常の授業実践を改善する視点にはなりえなかった。受講した高校生の回答を見る限りでは、論述する際に参考にする論文や書籍、記事などの要約そのものにも課題があるのではないかと指摘があった。

次年度は、提出された文章を添削するだけでなく、出前講座と組み合わせた要約・要旨をつくるワークショップや論述のプロットを作成していくワークショップを行うなど、文章を書くプロセスそのものを高校生と共有しながら、プロジェクトのあり方を検討していきたい。